神の僕としての生き方

Ⅱコリント6章1～13節
2021年10月3日
松田 基子 師

私たちは、イエス・キリストの十字架の贖いによる救いをいただいて、今朝もイエス・キリストを、自分の救い主、全存在の保証者として、感謝を抱き、こうして共に教会に集まり、礼拝を献げています。私たちは皆、御子イエス・キリストを遣わされた創造主なる神様の愛、私たちの罪を負って十字架に架かって下さった、イエス様の愛に、心から感謝しています。 しかし、私たちは何と欲張りなのでしょう。 永遠の命の保証をいただいただけでは満足しないで、

『この地上に於ける旅路も、どうか、安穏で、何も困らない様にして下さい。』

と祈り、私たちは天の保証も、地上の安穏も求める欲張りを、神様に押しつけているのではないでしょうか。

私たちは、この地上に生かされている以上、この世を捨てて、世捨て人になる事は出来ません。 しかし、常に、

『自分の国籍は天にある。 御国を目指して旅をしている自覚と、天の価値観で、この世を判断して行く事』

を**訓練**される**必要**があります。 その訓練から**逃げる**なら、人生途上で、天国への**道を見失って**しまうでしょう。 今朝はパウロの生き方から、

『キリストを信じ、キリストの僕として生きるとは、どういう生き方なのか』

を、学んで参りましょう。

さて、パウロが信仰者としての生き方を、心配した、コリント教会は、この世的には、富も、技術も、文化、学問も栄えた、時代の先端を行く大都市コリント市に生まれた教会でした。 奴隷階級の人々といえども、コリント市の住民としてのプライドがありました。 コリント教会は、パウロと同労者たちによって建てられた教会ですが、パウロはその開拓に、ユダヤ人の会堂を用いました。ユダヤ人は、地中海世界の至る所に出ていって移住しましたが、彼らは移住先で、自分達の信仰を守るために、礼拝と、子供の教育と、コミュニティーの必要から会堂を建てました。

パウロは、福音宣教に、その会堂を大いに利用しました。 当時はユダヤ教の会堂だけでなく、人々は、智者の話しを聞いたり、論じたりする事が大好きでしたから、講義所も沢山あり、広場でも演説が行われていました。 そこに沢山の巡回伝道者、巡回哲学者、巡回教師といった人々が存在しました。 パウロも彼らのように、3回の伝道旅行を行いました。 ところで、コリント教会に混乱をもたらせたのは、パウロがコリント教会の基礎を固めて、立ち去った後、エルサレム教会派の巡回伝道者がやって来て、

「パウロは生前のイエスさまから、弟子に召された訳ではないから、使徒ではない。 彼の言っている事は当てにならない。」

と言ったのです。

また、異言派の教師がやって来て、異言を語り、恍惚状態になる事を教えて、皆を夢中にさせました。 また、別の教師は、

「死者の復活は無い。」

と言ったりしたのです。 偽りの信仰によって、教会の中は、かき回されてしまいました。 パウロにとって、コリント教会の立て直しは、容易なことではありませんでした。 コリント教会の人々は、なぜ、いとも簡単に、パウロが語った信仰から逸れて行ったのでしょうか。

その根本問題は、イエス様が、神の子の位まで捨てて、わたしの為に、人の子となり、わたしの全ての罪を負って、身代わりの十字架に架かり、わたしが、命を差し出しても救われることのなかった私、という存在を贖ってくださった。
つまり、

『罪の滅びの運命から、買い戻し、救い出して下さった』

このお方を信じた信仰に依って、わたしはもう、神の国の存在に変えられたのだ。 これは命にも勝る宝であり、その恵みを下さったイエス様に、感謝が溢れ、

『イエス様のためなら、命も献げます。どんなことも受けて余りがあります。』

と言う、

『信仰と、キリストへの愛があるかどうか』

が問われているという事です。

コリント教会の人々は、イエス・キリストを信じたと言っても、信仰は未熟で、イエス・キリストへの愛が欠けていた為に、偽りの信仰に、惑わされ

てしまいました。 そこでパウロは、今朝の聖書箇所である、第二 コリント6章1節で、

「わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。 神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません。 なぜなら、
『恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。 救いの日に、わたしはあなたを助けた。』
と神は言っておられるからです。 今や、恵みの時、今こそ、救いの日」

と宣言しています。

恵みの時、救いの日と言うのは紀元前500年代半ばに、預言者第二イザヤが、イザヤ書49章8節で、バビロンの捕囚民の解放を預言して使った言葉です。 パウロは、その言葉を受けて、イエス・キリストによる、罪からの解放が、実現した今、この時、岩波訳に依りますと、

「見よ、今こそ絶好の時である。
見よ、今こそ救いの日である。」

と宣言したのです。 信仰は何時も、
今なのです。 **今が**問われます。

『昨日の信仰で、今日が赦されるのではありません。』
『昨日の罪が、今日悔い改めて間に合わない』

と言うのでもありません。

信仰は何時も今が問われています。 パウロはその点で、いつも今を生きた人です。 パウロはイエス・キリストの愛を、人間として、最も深く受け取った一人です。 彼の、イエス・キリストの愛に対する応答は、自分の全存在を、キリストのために使い尽くす事でした。 フィリピ1章20節で、言っていますように、

「生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるように」

と言う、その一事でした。

そのために、彼が心したことは、何であったでしょうか。 パウロは3節で、

「わたしたちはこの奉仕の務めが非難されないように、どんな事にも人に罪の機会を与えず、あらゆる場合に神に仕える者として、その実を示しています。」

と言っています。 岩波訳では、

「私たちは、この奉仕が、人々から誹(そし)られないために、如何なる事においても、如何なる躓きの機会をも、与えないようにしている。むしろ、全てのことに於いて、私たちは神の奉仕者として己を示している。」

と訳されています。

私たちは、
「イエス様を信じています。」
「イエス様が一番」

と何時も言っていますけれども、でも、どうでしょうか、問題にぶつかると、自我に支配され、自己主張をしては、周りに躓きを与えています。
パウロは何時も神に仕える者、神の僕としての自覚に、生きていました。 その彼の品性の土台は何であったかと言いますと、大いなる忍耐でした。 忍耐と聞きますと、

『じっと我慢して、言いたい事も言えない』

というイメージがあるのですが、パウロはそうではありませんでした。 彼は確かに、自分の事では我慢していますが、福音の為、キリストのためには、毅然として立ち向かっています。

次ぎに列挙されている言葉を見ますと、パウロの忍耐こそ、本物の忍耐だと言うことが分かります。

〔苦難、欠乏、行き詰まり〕

この三つは、社会一般、誰もが経験している困難です。 私たちはすぐに悲鳴を上げ、自分の内に持ち堪えられないために、

『何故、こんな事になってしまったのか』

と犯人捜しをして、糾弾することで、荷を軽くしようとします。 他者を糾弾したところで、解決は無いのに、持ち堪えられない為に、周りに重荷を負わせようとするか、或いは重荷に押しつぶされてしまいます。

次にパウロは、五節で、

〔鞭打ち、監禁、暴動〕

の3つを挙げています。 これらの三つは、パウロが、

「イエス・キリストは神の子、真の救い主、十字架に掛けられ、三日目に復活し、神の右の座に座しておられる、世界の審判者、このお方を信じる信仰によって、人は救われる。」

と言う、キリストの福音を語った事で、受けた苦しみです。 私たちは、

『人々から非難され、迫害されてまで、福音を語る事は出来ません』

と怯んでしまうところですが、パウロは、

第Ⅱコリント11章23節で、福音を語ったためにその身に受けた苦難を記しています。 投獄された事も多く、鞭打たれた事も多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。 24節は岩波訳によると

「**わたしはユダヤ人達から40に、一つ足りない、鞭打ちを、5度受け、ローマ人達から3度杖で打たれ、1度石で打たれ、三度難船し、一昼夜深い海の上で過ごした事もある**」

と述懐しています。

罪のこの世に於いては、イエス・キリストの福音は、それ程拒絶され、反感を買い、語る者を攻撃すると言う事です。 それだけに私たちは、なかなか相手に踏み込んで行けないばかりか、恐れ、語れないでいるのです。

でも、パウロは、

『キリストの愛に押し出されて、
また、相手の魂の尊さを知る故に、』

語らずにはいられませんでした。 キリストから受ける愛に依って、苦難を忍耐することが出来たのでした。

〔労苦、不眠、飢餓〕

ですが、パウロも生身の肉体でこの世の苦しみを受け、どんなに苦しかったことでしょうか。

私たちには、到底耐えられない事ばかりですが、パウロがこれ程の事に耐えられたのは、パウロの心が何時も、

『イエス様からの**愛で燃やされ**、
イエス様への愛に**溢れて**いた』

からです。

ここまでは、パウロが受けた苦難でしたが、6節からは、相手に対する、**パウロの態度**について述べられています。

〔純真〕 とは、不純なもの、邪悪な私欲がない、動機の純粋さです。

〔知識〕 それはこの世の知識ではなくて、神様を深く知る知識、霊的な洞察力のことです。

〔寛容〕 とは、相手の自由を認める心の広さです。

〔親切〕 それは相手に対する心からの共感です。 こちらが良かれと思ったことの押し付けではありません。

〔聖霊〕 ここでは、聖なる人間に整えられる事です。

〔偽りの無い愛〕 それは二心の無い真実の愛のことです。

〔真理のことば〕 それは人を生かす神の言葉のことです。

私たちにとっては、どれ一つ、

「出来ています」

といえることは無いのですが、パウロは堂々と

「**神に仕える者、神の僕としてその実を示している**」

と言っています。

しかし、彼はそう言うと同時に、

「**それらは、神の力によって、そうしています。**」

と言っています。

『全ては、神様の御力によって、パウロが神様に、自分の全存在を差し出したことによって、神様の霊である聖霊が、パウロを支配してパウロをそのように支配してくださっている。』

と証ししています。

7節には、意外な言葉が出て来ます。

「**左右の手に、義の武器を持ち**」

と言う言葉です。 パウロはこの世に対して、無防備ではありませんでした。 罪と悪の力の強さに、無防備で立ち向かうことは出来ません。

エフェソ書の6章には、神の武具に付いて記されています。

「**真理の帯、正義の胸当て、平和の福音の履物、信仰の盾、救いの兜、霊の剣、霊の助けによる祈り**」

などが神の武具として挙げられています。

神の武具で完全武装しないで、この世の戦いは、戦えないと言うことです。 私たちは何の備えもしないで出て行っては、この世の虜になってしまっているのではないでしょうか。 パウロの偉さの秘訣は、何時も神様の前にいる強さでした。彼はこの世の評価に、全く動かされませんでした。 8節に、

「**栄誉を受けるときも、辱めを受けるときも、悪評を浴びるときも、好評を博するときにもそうしているのです。**」

と言っています。

パウロの関心は、神様に対して如何に忠実に生きるか、唯それだけしか関心はありませんでした。 そこで彼は、

「わたしたちは人を欺いているようでいて、
誠実であり、」
と言っています。 イエス・キリストの福音を信じない人にとって、福音は、まやかし、欺きに思えるのですが、そこに神様の誠実が示されました。
次ぎに、
「人に知られていないようでいて、よく知られ、
死にかかっているようでいて、このように生きており、」
と言っています。 これだけの苦難、迫害を受けて、 不思議に守られていると言うのは、
『生かしておられるのは、神様である』
と言う以外にありません。
「罰せられているようで、殺されてはおらず」
と言っています。 パウロは人間の裁判に何回掛けられたことでしょうか。 告発者は死刑をもとめるのに、死に渡される事はありませんでした。
次ぎに、
「悲しんでいるようで、常に喜び」
とあります。 この世の安逸を求める人にとって、パウロの苦労の人生は、何と惨めで、悲しいものに見えたことでしょう。 しかし、本人は、イエス様と共に生き、共に乗り越えて、喜びに満ちていました。 次ぎに、
「物乞いのようで、多くの人を富ませ」
と言っています。 パウロはエルサレム教会の窮乏を知って、コリント教会を初め、地中海世界の諸教会から、エルサレム教会への献金を集め、持って行きました。 この様に、パウロは、何をしても、反対者達から非難されました。

しかし、パウロは誇りを抱いていました。
「無一物のようで、全てのものを
所有している」
と言う誇りでした。 パウロの考えは、ローマの信徒への手紙8章32節で、述べています通り、
「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありましょうか。」
という確信でした。 彼はキリストが、全てに勝る全てであり、キリストで満ち足りていたのです。

パウロは一番価値あるものが何か、永遠に価値有るものが何かを知っていました。 彼は見えるものにではなく、見えないものに目を注ぎ、天に属する者として、天の価値観で生き通したのです。 それがキリストに仕える者、キリストの僕としての生き方である事を、コリント教会の信徒さん、そして、また、私たちに語っています。

車先生は、
「キリスト者の地上の歩みは、苦難であっても、
不幸ではない」
と言っておられます。 私たちは、キリストの御救いを受け、天の国籍を与えられながら、苦難に襲われますと、自分を不幸だと思っていないでしょうか。 人間の最も不幸は、永遠の滅びです。
イエス様は、ヨハネ福音書16章33節で、
「あなたがたには世で苦難がある。 しかし、
勇気を出しなさい。 わたしは既に世に勝っている。」
と言われました。

私たちはパウロのように、立派な生き方はできなくても、そこに目標が示されています。
『イエス様の愛の深さを更に深く、知る者と成らせてください。 イエス様が共にいて、苦難を乗り越えさせてください。』
と祈り、苦難の時こそ、イエス様に信頼し、神様の僕としての生き方をさせてくださいと、祈りつつこの世の旅路を生き抜いて行こうではありませんか。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様

罪の滅びに向かっていた者を憐れみ、
御子イエス・キリストによる御救いを、お与えくださった愛を受けながら、神の僕に相応しからぬ生き方をしていますことを、お赦しください。

パウロとはほど遠い者でありますが、唯ひたすらキリストの愛に応え、神の僕としての道を歩むことが出来ますように、御聖霊が私たちの内に内住し、導き育ててくださるように
心からお祈りを致します。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りをいたします。
アーメン。